

したがって、総損失（病人を除く）は、四五万九、五一一人となる。約四六万人である。これは東部陸軍三四〇万人の平均現員（現在兵力）の一三・五％に達するものだった。また、第二戦車軍団からの報告も特筆に値する重要事項として抜き出して書き記している。それによれば、第三戦車師団ははやくも出動可能な戦車がわずか二〇％になっていた。修理中ないし完全欠損、すなわち戦闘の役に立たない戦車がなんと八〇％にも上っていた。第四戦車師団はこれより少し良好だった。それでも出動可能が二九％、修理中ないし完全欠損が七一％に達していた。第一七戦車師団は出動可能が二二％、修理中ないし完全欠損が七九％。第一八戦車師団は出動可能が三一％、修理中ないし完全損失が六九％⁽³⁰⁾。

九月一七日のハルター日記は人的被害について、この一週間に負傷者、戦死者、行方不明がさらに増加したことを書き留めた。将校一万六、三八三人、下士官・兵士四六万一六九人、合計で四七万六、五五二人と。この総損失（病人を除く）は東部陸軍平均現員三四〇万人の一四％だった。⁽³¹⁾ さらに九月二七日の記載によれば、一三日までの被害は、将校一万七、六一一人、下士官・兵士五〇万五、二二二人、総損失は五二万二、八三三人となった。これは、ドイツ東部陸軍の平均現員三四〇万人の一五・三八％であった。⁽³²⁾ さらにその三日後、九月二六日までに、総損失（病人を除く）は、五三万四、九五二人となった。⁽³³⁾

バビ・ヤール事件に関して以上の軍事的推移の文脈で理解する必要がある。すなわち、要塞都市キエフの独ソ戦における重要性、一カ月以上に及ぶキエフ争奪戦の激しさとキエフ郊外バビ・ヤール峡谷のユダヤ人大量殺害との内的な連関を把握する必要がある。うなぎのほりになりつつあるドイツ軍の被害の大きさは、軍が制圧した後の拠点都市の治安平定作戦を規定する。戦時下、激戦直後のドイツ占領下で行われた無数のユダヤ人迫害事件の象徴的典型的力

学構造がこの事件に示されている。「ホロコースト・エンサイクロペディア」などに依拠しながら簡単に要点を述べれば、それはつぎのようであった。

四一年九月一九日、ドイツ第六軍と第二九軍団がキエフ占領を果たした。キエフのユダヤ人約一六万人のうち一〇万人がドイツ軍による占領以前に逃亡していた。約六万人がドイツ占領下のキエフに閉じ込められた状態になった。ところがそのキエフで、四一年九月二四日から二八日にかけて市中心部の多数の建物が炎上した。建物の多くはドイツ軍管理当局や軍によって利用されていた。占領のために貴重な建物群が炎上したのである。この放火炎上・火薬倉庫爆発事件でたくさんのドイツ軍関係者とキエフ市民が死亡した。戦後判明したところでは、その爆破はソ連治安警察が行った爆破・破壊作戦によるものだった。犯人が確実でなくても、ソ連秘密警察ないし特殊工作部隊がドイツ占領軍施設を破壊しようとするのは必然のことだった。ソ連軍が撤退に際し、敵の軍事関係施設を破壊するために残して置いた秘密工作隊が簡単にかまるとはさすがない。だがキエフ大火、爆破炎上の犯人を見つけ出し、鉄槌を加えなければならぬ。放火犯人も見つけ出せないようでは占領権力の信頼は失墜する。本当の犯人を探し出せないとすれば、それに替わるものを見つけ出さなければ報復の熱情は収まらない。大都市キエフ市民の不満と不安を和らげることもできない。戦火で住宅を失った市民の怒りをなだめ、仮住まいを与えなければならぬ。四一年九月二六日、ドイツ占領当局は会議を開いた。その結果、ドイツ占領軍関係施設の破壊行為にたいし、キエフ市のすべてのユダヤ人を処刑することにした。この会議に参加したのは軍行政官エバーハルト少将、南方陸軍集団後方地域担当高級親衛隊・警察指導者フリードリヒ・イエツケルン親衛隊大将、^{アインザッツグルッペン}特別出動部隊Cの隊長で親衛隊少将オットー・ラツシエ博士⁽³⁴⁾、それにその小隊（特別コマンド4a）の長、パウル・ブローベル親衛隊大佐らだった。つまり、ユダヤ人抹殺作戦は、軍と警察の協議と協力による作戦だった。キエフ市の全ユダヤ人を殺す作戦の実行は、特別コマンド4aに託された。四一年九月二八日のユダヤ人にたいする告示。「一九九日午前八時にメルニク通り・デクチャレフ通り交差

点に、新しい居住地への移住のため集合せよ」と。戦時下、大量の住民が移住させられることは、すなわち強制移住自体はよくあった。連行途中、逃亡を図ったりついていけない者は警備の部隊に射殺された。連行に抗することはできない。移住行進が生きる道である。しかし、それは死への行進だった。四一年九月二九日と三〇日、バビ・ヤール溪谷でユダヤ人三万三、七七一人が射殺、埋葬された。その中にはもちろん小さな子供もたくさんいた。その後数カ月、さらに何千人ものユダヤ人がバビ・ヤールに連行され、殺害された。⁽³⁵⁾

その背後でドイツ軍の被害は増大しつづけた。モスクワ攻撃を再開し、早い冬の到来もあってドイツ軍は最初の「冬の危機」に直面する。四二年一月一三日までの総損失は、ハルダー日記一二月一七日によれば、将校二万二、八一人、下士官・兵士六万七、九一三人、合わせて六十九万九、七二六人となった。総損失（病人を除く）は、東部陸軍平均現員三四〇万人の二〇・五八%、すなわち実に二割を越えたのである。⁽³⁶⁾しかも、向かうは厳冬の大口シア。スターリン体制下の内実がどうであれ、ドイツ側前線に見えてくるのは、繰り返し撃滅し大量に捕虜を捕獲しても、なご陸続と登場する新手のソ連部隊である。この前線での脅威をひしひしと感ずるとき、後方地域、占領平定した地域、本国と前線との中間地域の治安問題解決の手段は苛烈になる。

三 バルバロッサ作戦の挫折とヒトラー指令

ユダヤ人絶滅政策をめぐる従来の議論は、ヒトラーの「絶滅命令」なるものの有無や時期についてあまりにも一面的先鋭的に問題にすぎている。それに対して、拙著（一九九四年）はドイツ第三帝国のソ連占領政策を正面に掲げた。まずは独ソ戦ありきだった。方法的問題提起として、従来のヒトラー命令に一面的にとらわれたユダヤ人問題・ホロコーストの理解枠組みへの根本的批判を意図した。⁽³⁷⁾その方法的立場からすると、ヒトラーが四一年七月八月当時、

実際に発した命令類を見直す必要がある。ないものを探すより、あるものを正確に歴史の全体像、独ソ戦の全体像の中に位置づける必要がある。四一年七月から八月当時、何が彼の中心課題であったのか。何が彼の精神的能力の大部分を費やさせていたのか。彼はそのころ何に没頭していたのか。そうしたことこそ丹念に見なければならぬ。はたして、四一年八月当時、彼はドイツ本土やオランダ、ベルギー、フランスなどのユダヤ人の運命について、心を砕いていたのか。否である。いまだにヒトラー・ナチスの政策の「二つの基本的な目的、東方領土拡大とユダヤ人大量殺害」というドグマがあるが、ヒトラーの精神においてこの二つは、「基本的目的」という平板で並列的なレベルのものではない。私の一貫した見方では、ユダヤ人大量殺害はヒトラーの基本的には位置しない。第三帝国の総統・国防軍最高司令官としてのヒトラーの課題は、東方領土拡大、東方大帝國建設、それを基盤とした世界強国ドイツの建設である。その中心にはドイツ民族至上主義、民族帝國主義、裏返しドイツ民族の被害意識がある。ユダヤ人大量殺害の中心的担い手ヒムラーにおいても、彼の東方諸民族取り扱ひに関する秘密覚書が示すように、ユダヤ人大量殺害はそれ自体が基本目的ではない。⁽³⁹⁾

バルバロッサ作戦にしても、それはヒトラーの世界戦略の一環を構成するものでしかない。バルバロッサ発令一カ月前の総統・国防軍最高司令官としてのヒトラー指令第一八号は、国防軍最高司令部が近い将来の戦争遂行のために準備する諸措置はつぎの指針に従うものとする⁽³⁸⁾と前置きして、全ヨーロッパ的な指針を与えていた。それは、(1)フランスとの関係、(2)スペインとポルトガル、(3)エジプトにたいするイタリアの攻撃、(4)バルカン、(5)ロシア、(6)イギリス上陸、(7)各軍最高司令官の報告という構成になっている。すなわちヨーロッパ戦線全域にわたる指令を国防軍最高司令部、および各軍最高司令官に出しているのである。

(1)ではフランスにたいする私の政治目標は、イギリスにたいする今後の戦争遂行で可能なかぎり最大限に効果的なやり方でこの国と協働することであると示した。対独協力のヴィシー政府がこの政治目標に呼応する勢力である。(2)で

覇権をめぐる争い)、第一次世界大戦の経緯、ヴェルサイユ条約の過酷な内容、そのドイツへの影響は、計り知れない深刻な影響を若きドイツ人エリートに与えた。その関連で一九九八年ドイツ歴史家大会で問題になったのは、戦後西ドイツ歴史学界を指導したコンツェヤシーダーのナチ体制下の仕事であった。その点については、拙稿「ドイツ歴史学と現実政治」『歴史評論』第 五九一号、一九九九年七月を参照されたい。

- (35) Shmuel Specter, "Babi Yar", in: *Enzyklopädie des Holocaust*, hrsg. v. E. Jäckel u. a., Berlin 1993. さらに, "Babi Yar: Killing Ravine of Kiev Jewry-WW II", in: <http://www.geocities.com/Paris/Rue/4017/BABIYAR.HTM>. ソ連時代のナチ戦争犯罪調査によれば、約一〇万人がこのバビ・ヤールの渓谷で殺された。四三年七月、ソ連赤軍がドイツ軍を撃退しつつ、この地域に向かって進撃してくる。ユダヤ人射撃作戦を指揮したハウル・ブローベルがキエフに戻ってくる。彼の今回の任務は、親衛隊中将マックス・トーマス博士(ウクライナ担当の治安警察・保安部将校)と協力して、バビ・ヤールの谷で行った大量射殺・大量埋葬の証拠を隠滅することであった。ブローベルはそのため、特別部隊 1005 を編成。1005-A 部隊は、バウマン親衛隊中尉の指揮のもと、八人の保安部隊員、三〇人のドイツ警察官から編成された。ブルドーザーで掘り出した死体の焼却作業は、近くの強制収容所から三二七人の囚人(そのうち一〇〇人がユダヤ人)を連れてきて行われた。ドイツ人特別部隊員は、その監視役。死体焼却は、四三年八月一八日に始まり六週間続き、四三年九月一九日に終了。埋葬場所の痕跡を一切残さなかった。四三年九月二九日の朝、この作業にあたった囚人たちは殺されることを察知し、逃亡を計画。同深夜、暗闇に助けられ二五人の囚人が脱出。逃亡に二五人が成功。関係したドイツ人特殊部隊員には完全黙秘が命じられた。たとえば、ヘウムノ(クルムホーフ)で一〇万人に上るユダヤ人をガス自動車(トラック排気ガス)で殺害した作戦に従事したポトマン以下八五名の隊員にたいする完全黙秘命令(ヒムラー個人参謀部アレント部長から帝国保安本部カルテンブルンナー博士宛て書簡)は、つぎのように言う。ヒムラー、すなわち「親衛隊帝国指導者は、親衛隊大尉ポトマン指揮下の八五名の隊員を、彼らの長期休暇終了後、一まとめにして親衛隊「アリンツ・オイゲン」義勇兵師団に配属したいとお望みである。親衛隊帝国指導者は、あなたに次のことを希望している。すなわち、この隊員たちを出勤前にもう一度集合させ、特別コマンド時代を抹消させ、たとえちなりとはのめかすような形でもそのことについてしゃべってはならないと、厳格に義務づけるように」と。Schreiben Brandts an Kaltenbrunner vom 29. 3. 1943. BA NS 19/2635. 総督府のラインハルト作戦(ポーランド・ユダヤ人抹殺作戦)の三つの絶滅収容所ベウゼッツ、ソビボル、トレアリンカも四三年一月には解体され、証拠隠滅が行われた。四三年一月四日のラインハルト作戦執行者グロボチニク Globocnik (四三年一月時点では新任務についており、肩書きはアドリア海沿岸地域高級親衛隊・警察指導者)の親衛隊帝国指導者・ドイツ警察長官ヒムラー宛ての書簡によれば、「帝国指導者様 私は四三年一月一九日に、私が総督府で

遂行したラインハルト作戦(Aktion Reinhardt)を終了し、すべての収容所を解体しました。作戦終了報告は、添付ファイルで提出申し上げますこととお許しください」と。Schreiben Globocniks an Himmler vom 4. 11. 1943. in: BA NS 19/2234, Bl. 30.

- (36) BA-MA, RH 2/125, Bl. 141.
- (37) 拙著『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆 1941-1942』同文庫、一九九四年。
- (38) たとえば、Tomasz Kranz, "Das KL Lublin - zwischen Planung und Realisierung", in: *Die nationalsozialistischen Konzentrationslager - Entwicklung und Struktur*, hrsg. v. Ulrich Herbert, Karin Orth und Christoph Dieckmann, Göttingen 1998, Bd. 1, S. 363. かつてドイツの第三帝国研究の第一人者イエツケルのこの見方をつぎの拙稿で批判した。拙稿「第三帝国における『国家と経済』—ヒトラーの思想構造にそくして—」遠藤輝明編『国家と経済』東京大学出版会、一九八二年所収。
- (39) 前掲拙著を参照されたい。
- (40) Weisung Hitlers, Nr. 18 vom 12. 11. 1940, in: BA-MA, RW4/v. 35, Bl. 45-52.
- (41) 前掲拙稿「ヒトラーの思想構造にそくして」。
- (42) Weisung Hitlers, Nr. 33: Fortführung des Krieges im Osten, 19. 7. 1941, in: BA-MA, RW4/v. 35, Bl. 53-55.
- (43) Statistischer Bericht des Inspektors für Statistik, in: Léon Poliakov/Josef Wulf, *Das Dritte Reich und die Juden*, München u. a. 1978, S. 244.
- (44) Weisung Hitlers, Nr. 34, 30. 7. 1941, in: BA-MA, RW4/v. 35, Bl. 60-62.
- (45) Keitel, Ergänzung der Weisung, 12. 8. 1941, in: BA-MA, RW4/v. 35, Bl. 63-65.
- (46) Befehl Hitlers, 15. 8. 1941, in: BA-MA, RW 4/v. 35, Bl. 69.
- (47) Hitler an den Oberbefehlshaber des Heeres vom 21. 8. 1941, in: BA-MA, RW4/v. 35, Bl. 71-72.
- (48) Weisung Hitlers Nr. 35, in: BA-MA, RW4/v. 35, Bl. 75-77.
- (49) Weisung Hitlers Nr. 36 vom 22. 9. 1941, in: BA-MA, RW4/v. 35, Bl. 81-83.
- (50) Schreiben Heydrichs an Himmler vom 20. 10. 1941, in: NS 19/3882.
- (51) Adolf Hitler, *Monologe im Führer Hauptquartier 1941-1944. Die Aufzeichnungen Heinrich Heims*, hrsg. v. Werner Jochmann, Hamburg 1980, S. 106. 「ヒトラーのテーアルトーク」(上)、吉田八峯訳、三交社、一九九四年、一四五ページ。ただし、本文中の翻訳は引用者による。
- (52) ウツチ(リッツマンシエタット)のゲッターには、四一年一月一六日から一月四日にかけて、合計一〇列車で総数一万九、



9784818813212

ISBN4-8188-1321-4

C3036 ¥5900E



1923036059004

定価 (本体5900円+税)

H O L O C A U S T

独ソ戦と ホロコースト

- 序章 問題の視角と限定
- 第1章 独ソ戦勃発期のドイツと占領地
- 第2章 独ソ戦の現場とホロコーストの展開
- 第3章 東方占領地の拡大、高まる抵抗と「冬の危機」
- 第4章 総力戦への転換とヒムラー命令の諸相
- 第5章 スターリングラード敗北後の総督府の全体状況と民衆
- 第6章 「7月20日」事件前夜とドイツ人民衆の動向
- 第7章 疎開、逃避行、追放による難民化と「普通のドイツ人」
- 第8章 総括